

国際コミュニケーションを目指した英語ビデオ教材の分析
-国際英語と ESP の接点-

岩井千春(大阪大学大学院)

1. はじめに

日本の英語教育界では、ESP(English for Specific Purposes)の研究が 1990 年代中頃から注目されるようになってきた。文部科学省の「英語が使える日本人」の育成のための行動計画¹(2003 年 3 月 31 日)では、その目標が「大学を卒業したら仕事で英語が使える」こととなっており、国際コミュニケーションを目指した ESP が益々重要な役割を担うようになってきた。

一方、国際英語論は、ESP と同様に国際的な視野でのコミュニケーションをテーマとしているが、特に英語の変種や、それらの変種と国民性、民族性との関係、また国際英語教育(日野 2003、岩井 2004)に至るまで、様々な研究が進められている。ESP との関連性についても議論されている(Bhatia 1997、Widdowson 1997)が、本稿では ESP のニーズ分析との関係についても新たな分析を加え、ESP と国際英語論の関係を更に深く考察したい。その上で、ESP のビデオ教材を国際英語の観点で分析し、国際コミュニケーションを目指した ESP 教育の実践における国際英語論の意義と、両者の今後の発展の可能性について議論したい。

2. ESP と国際英語論

2.1 ESP とは

ESP の歴史については、Dudley-Evans & St. John (1998)によると、古くは、16 世紀のプロテスタントの移民により、イギリスの英語教育界でビジネス英語に関心が生まれたことを起源とする。19 世紀には、「商業英語」やビジネスレターのテキストが存在していたが、大きな発展のきっかけとなったのは、1950 年代からの世界経済の発達(科学技術の発展、国際語としての英語の需要の増大、英語圏への留学生の増加など)によるものであり、更に ESP が一つの専門分野としての地位を築いたのは、1960 年代の後半からであった(Dudley-Evans & St. John 1998)。このように、ESP は様々な国の人々が英語で有効にコミュニケーションを図ることを目的に発達してきたのである。日本では、ESP 教育の多くはホテルのような企業内か専門学校で行われ、大学で実施されるのは少なかった(Morizumi 1994)為、英語教育界で広く注目され始めたのは 1990 年代中頃以降である。

ESP の分類は、専門分野の学問研究に使用される EAP(English for Academic Purposes)と職業分野で使用される EOP(English for Occupational Purposes)に大別される。例えば、医学部の学生が研究をする為に使われるのが EAP であり、医師が患者と話をする時や職業的研究をする為の英語は EOP である。本研究の 3 で分析を行うホテルのビデオ教材は、EOP セットアップである。

ESP の基本的な特徴として、Dudley-Evans & St. John(1998)は次の二点を挙げている。

- 1 学習者のニーズに対応するように設けられている。
- 2 ESP はその専門分野のジャンルに学習の中心をおく。

ESP は、学習者が現在、または将来所属する集団(ディスコース・コミュニティ)の英語使用を分

析し教育することを目的とし、学習者やその社会集団のニーズに対応している。

Swales(1990)によると、ディスコース・コミュニティ²とは、共通の目的をもった人々の国際的な社会集団であり、同じ興味や資格をもった人々が成員となる。その媒体は、話し言葉と書き言葉の両方である為に、遠隔地に住む人々とも情報交換は容易である。(遠隔地の人々との主な情報交換は、文書が一般的である。) また、言語行動の決定要素は、機能的なものであり、ディスコースの特徴を決定するものは、目的を達成する為のコミュニケーション・ニーズである。

ESP では、社会集団であるディスコース・コミュニティの特定の目的が英語使用に影響することに着目し、それがジャンルと呼ばれる具体的なコミュニケーションの種類を生んだものと考えられている。

ジャンルとはレジスターがディスコース・コミュニティのコミュニケーション活動の目的によって特化された形(Swales 1990)であり、それぞれ書き言葉と話し言葉の両方を含んだ英語の種類(深山 2000)のことである。このジャンルについて、Swales(1990)は以下のように説明している。

A genre comprises a class of communicative events, the members of which share some set of communicative purposes. These purposes are recognized by the expert members of the parent discourse community, and thereby constitute the rationale for the genre. This rationale shapes the schematic structure of the discourse and influences and constrains choice of content and style.

(Swales 1990: 58)

即ち、ディスコース・コミュニティのコミュニケーション上の目的がジャンルの形を規定するということであろう。

このように、ジャンルとは、学習者が所属するディスコース・コミュニティ内で実際に使用されている英語の種類であり、ESP 教育では、このようなジャンルとそれについての分析を教育に応用している。

コミュニケーション能力の向上を目指した英語教育においては、文法能力、社会言語的能力の他に、generic competence(ジャンル分析能力)が必要であると指摘されている(Bhatia 1997)。Generic competence(ジャンル分析能力)とは、特定のテキストが何故そのように書かれたのかという問題を扱い、社会的な文脈の中でのコミュニケーション上の目的を達成する為に適切なジャンルを選ぶ能力であるという。

また、ジャンルを教育に生かした具体的な研究例については、学習者がジャンルを学びやすくする為に、ジャンルが持つ言語的特徴や内容に関しては大きな変化を加えずに理解しやすい形に応用して教材化する必要があると指摘されている(Bhatia 1993)。また、同様に、ジャンルを学習者によりよく理解させる為に、特に PAIL(Purpose=そのジャンルが作られた目的, Audience= ジャンルの受信者, Information= 含まれる情報, Language=言語的特徴)の点について意識させる教授法も提案されている(Noguchi 1997a, 1997b)。

更に、ESP では、ネイティブスピーカーの直観が、必ずしも特定のディスコース・コミュニティの言語使用とは一致しないということが指摘されている(Noguchi 2003)。これは、ディスコース・コミュニティの言語使用が、長年の慣習に根ざして形成されたものである為、それぞれのコミュニティの中で独自の形式を持つ可能性を示している。これは、ESP 教育におけるジャンル分析の必要性を示すものである。

2.2 国際英語論とは

国際コミュニケーションの為の英語は、その母語話者に留まらず、今や多くの国や地域の人々によって使用されている。統計的に見ても、英語の非母語話者の数が益々増加し、母語話者を上回ると言われている(Crystal 1985, Jenkins 2002, Smith 1988)。このような国際的な英語の広がり鑑み、国際英語論では様々な国や地域で使用される英語の変種の分析と共に、国際コミュニケーションに関する多様な研究が行われてきた。

国際英語論は、「文字通り「国」を分析の基本的な単位としてきた」(日野 2003:17)為、スピーチ・コミュニティの概念に基づいていると考えられる。Swales(1990)によると、スピーチ・コミュニティとは、同じ言語規則を共有している人々の集団であり、その地域に生まれ育ったり、偶然住むことになった人達によって成員の条件は継承されており、地域性と密接に関わっている。また、言語行動の決定要素は社会的なものであり、ディスコースの特徴を決定するものは、社交や団結といったグループのコミュニケーション・ニーズとなっている。即ち、スピーチ・コミュニティとは、より一般的な共同体と言えよう。

国際英語は、「母語話者あるいはアングロ・アメリカンの言語的・文化的枠組を超えた英語」(日野 2003:12)であるとその特質が示されており、英語の母語話者の基準から他の国や地域の英語話者を解放し、それぞれの英語話者は自分の文化や国民性などを反映する、独自の英語を話すことができるとしている。また、同様に、国際英語の理念について國弘(1984:12)は、世界のコミュニケーション手段として英語が実用性を持っているという現実と言及しながら、英語を「イギリス、アメリカを脱民俗化し、脱国家にしたもの」であると主張している。

また、特に日本人の文化を反映した日本式英語³に関する論考もある(渡辺 1983)。渡辺(1983:57-58)は、「日本語の影響を色濃く持った英語-これをジャバリッシュと名づけた-を堂々と胸を張って使い、実際の民際(People-to-people または inter-peoples)言語環境の中で交流を生むことこそ、日本人が外国語を学ぶ本当の意味」と述べ、日本の文化や国民性に根ざした日本式英語によって、日本人は無理なく英語学習を進められ、国際コミュニケーションも比較的容易なものになると述べている。

しかしながら、国際コミュニケーションにおいて英語話者がそれぞれの英語の変種を用いれば、コミュニケーションで誤解が生じるのではないかという懸念もある。そこで、相互理解の為、どのようにすればよいかについての議論も成されてきた。

Smith(1983)は、従来の ESL(English as a Second Language)や EFL(English as a Foreign Language)を合わせた ESOL(English to Speakers of Other Languages)という着眼点での英語教育ではなく、EILL(English as an International and Intranational Language)という、国際英語論の視点での英語教育が相互理解の為に重要であると述べている。English as an International Language とは、様々な国の人々がコミュニケーションを図る為に使う英語であり、English as an Intranational Language とは、異なった母語を持つ同じ国の人々が国内でコミュニケーションを図る為に使う英語であるという。Smith(1983)は、この EILL という概念は、実際の英語使用の現況をより正確に反映していると述べ、特に EIL(English as an International Language)では英語教育のモデルを英語の母語話者ではなく、“Any educated speaker of English”とすることが可能であると述べ、教育のターゲットも、互いに理解し合える状況と述べている。更に、EIL では、英語の母語話者も、他の言語の母語話者が理解できるような話し方、書き方について教育されるべきとの言及があることは特筆に価する。EIL 論では、全ての言語の話者が比較的対等な立場で(英語使用の場合は英語の母語話者が有利であることは当然であるが)、相互理解の為に歩み寄りながら、国際コミュニケーションを成功に導こうと言う主張であると考えられる。

更に、様々な英語の変種の理解しやすさの問題について実証的研究がある(Smith 1988)。この研究では、英語の母語話者が、他の言語の母語話者に比べて、一番理解しやすい英語の発音をしていた訳ではなく、また、他の英語の変種を最も理解していたとは言えないと証明された。即ち、国際コミュニケーションにおいて、英語の母語話者であることが、英語で意思疎通を図る上で十分な条件であるとは言えないということであり、英語の母語話者であるか否かより、寧ろ、他の英語の変種に慣れているかどうか国際コミュニケーションでの相互理解において重要であると主張されている。これは、国際コミュニケーションにおける「ネイティブスピーカー信仰」を覆すといった意義も大きい研究であろう。

また、同様に、特に音韻論的な視点からの、近年の注目すべき論考として、国際コミュニケーションの成功の為に最低限守るべき基準、core となる発音を提案した研究もある(Jenkins 2002)。この研究では、音韻レベルの問題により、英語の非母語話者同士の理解がどの程度不可能になるのか、またその失敗にはどのような音韻の特徴があるのか、などについての実証的な研究を行い、国際コミュニケーションを成功に導く為に最低限守るべき発音の基準を設けて教育の提案を行っている。

2.3 ESP と国際英語論の関連性について

このように ESP と国際英語論は、共に国際的なコミュニケーションを主眼とした研究であり、英語の母語話者の言語使用を基準としないという点で共通点がある。本節では、特に ESP のニーズ分析における国際英語論の役割を考察し、更に、その他の先行研究も概観して、ESP と国際英語論の関係を考察したい。

2.3.1 互いに提供する重要な視点

ESP は、国際的なコミュニティの中でコミュニケーションを図ることを目指している為、国際英語論の観点は重要である。特に、近年発展が目覚ましいビジネス英語の分野では、そのほとんどのインターアクションは英語の非母語話者同士であり、その場合は英語圏の文化に根ざした態度で英語を話す可能性はより低いと考えられている(Dudley-Evans & St. John 1998)。

また、国際英語論の立場からも、「脱英米化した「国際英語」(中略)とでもいうべきものが、政治や経済、外交や貿易といった実務レベルで激しく求められはじめていた」(國弘 1984:3)との指摘があり、国際英語と ESP の密接な関係を示唆している。また、更に、Quirk(1988)の人間の言語が広がるモデルについて述べた論考では、近年特に多くなってきたのは、特別な目的の為に国際的に英語を使う場合の econocultural model であり、長期的には、この要因で英語がますます必要となると述べられている。この econocultural model とは、まさしく ESP が考える国際的なコミュニティでの目的を持った英語使用である。

2.3.2 ESP のニーズ分析における国際英語論の視点

2.1 で述べたように、ESP においてニーズ分析はコースデザインの基礎となるものであり、さまざまなニーズの種類に関する議論、特定の分野のニーズの実態やその教育への応用などが活発に研究されている。

そのニーズ分析の草分けとして知られる Munby(1978)に、国際英語の視点が含まれている。Munby は、ニーズ分析によってそれをシラバスの内容や教材に生かす重要性について述べた上で、Communication Needs Processor(CNP)という装置を提案、コミュニケーション・ニーズに影響を与える要素(分野、場所、役割、目的、レベル etc.)を分析して、学習者の目標とすべき英語運用

能力のニーズを判定している(Target Situation Analysis)。その中で、英語の変種の分析について以下のように説明している。

Given the constraints of physical setting, role-set, and purpose, one is now in a position to process the input for dialect, e.g. to specify whether it is British or American English, or a regional variety of either, that is more appropriate for the participant to produce or understand.

(Munby 1978: 36-37)

ここでは、regional variety と呼ばれるのが特に国際英語で注目されているものであり、学習者にとって必要な英語であれば、それらの変種を分析し、シラバスに反映する必要があると述べている。また、Munby(1878:87)は、以下のようにインド国内で使用される英語変種の例を取り上げ、全ての ESP が Standard English⁴ の基準だけで実践されるのではなく、英語が話される地域の変種の特徴を考慮する必要性について具体的に説明している。

If, on the other hand, we have an Indian participant who needs English for *intranational* use with other Indians from all over the sub-continent, the appropriate dialect is Standard Indian English, which is a national standard of English, to be used with a General Indian pronunciation.

(Munby 1978:87, emphasis original)

それでは、具体的に Munby(1978:162)で紹介されている CNP の項目について考えたい。

CNP には、DIALECT という項目があり、それには Regional と Social class という下位範疇が存在する。国際英語論と関連が深いものは Regional と考えるので、本稿では特に Regional の項目に焦点をあてる。最初に学習者が英語を使用する国や地域、特定の場所(例えば工場や学校)、使用の範囲、そして、どのような国の人とコミュニケーションを図るかを特定したあと、以下のような項目が続く。

Dialect and accent

5.1.1 Which of the following (one or more) does the participant need to be able to understand / produce?

Standard English / a national standard / a local dialect

5.1.1.1 Where applicable, specify the national standard / local dialect, using the classification of regional dialect below.

5.1.2 Does the participant need to be able to understand / produce a general or a regional accent of English, or both?

5.1.2.1 If general, specify RP / General American / General Indian / etc.

5.1.2.2 If regional, state the localized accent for the specification at 5.1.1.1.

(Munby 1978: 162. emphasis original)

上記の CNP の項目からも明らかなように、学習者がどのような英語の変種を理解し、発信しなければならぬかという問題について、質問 5.1.1 や 5.1.1.1 については言語形式の種類について、5.1.2 や 5.1.2.1 又は、5.1.2.2 については音声的なアクセントについての項目があり、英語の変種

に対して詳細な分析を意識していることが理解できる。5.1.1.1 や 5.1.2.2 で言及のある“the classification of regional dialect”では、イギリス、アメリカ、カナダ、オーストラリアなど英語を母語とする国の変種だけではなく、カリブ、インド、南アフリカなどの第二言語としての英語を使用する国の変種の項目がある。(日本や韓国など外国語としての英語を使用する国の変種には個別の項目はなく、最後に設けられた“Other”という項目に全て含むと考えられる。)

このように、ESP のニーズ分析の基盤を築いた Munby の研究においても、ニーズ分析の項目に国際英語で議論されている英語の変種が重要な要素として含まれていることは注目すべき点である。

2.3.3 コミュニティへの視座

前述(2.1, 2.2)のように、ESP はディスコース・コミュニティ、国際英語論はスピーチ・コミュニティ、という、それぞれコミュニティへの視座がある。

そういったコミュニティの概念にも触れる研究で、Widdowson(1997)は、以下のように、国際英語と ESP の関連性について述べている。

I would argue then that English as an international language is English for specific purposes. Otherwise it would not have spread, otherwise it would not regulate itself as an effective means of global communication. And otherwise there would, for most people, be little point in learning it at school or university.

(Widdowson, 1997: 144)

Widdowson は、英語は、使用する人達の地域、分野や、その用途により形を変えていきながら広がったと述べ、国際英語として使用されているのは、特定の目的を持って英語使用をする ESP のセッティングであると主張する。また、国際コミュニケーションでは、英語の話者がどこの出身かが重要なのではなく、その話者が何をしているかが重要であると述べる。即ち、実際に人々が国際的な英語使用を行っているのは、国際英語論が基礎を置く、スピーチ・コミュニティではなく、(Widdowson が「二次的な国際的コミュニティ」と呼ぶ)ESP のディスコース・コミュニティであると考えられる。

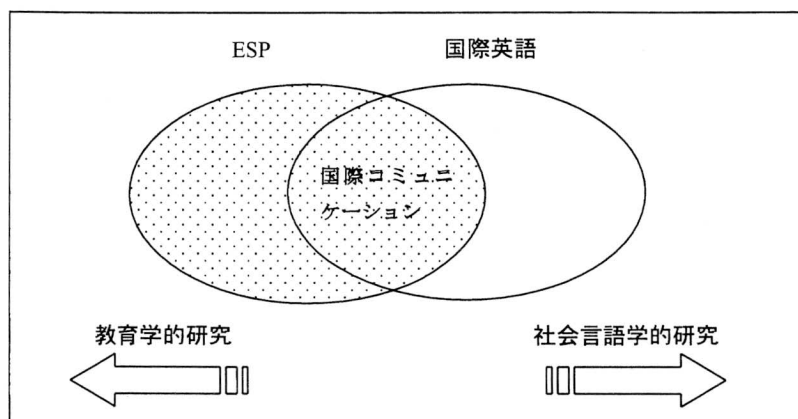
2.4 まとめ

これらの先行研究を概観すると、ESP と国際英語論の関係の深さが理解できる。即ち、両者共に、国際的なコミュニケーションを目指している為に重なり合う概念が多いからではないかと考えられる。

しかしながら、ESP と国際英語論には当然違う部分もある。ESP では特定の言語使用などの研究を教育へ応用するという目的がある為、教授法や教材開発の研究が活発である。一方、国際英語論では、教育面での実践的研究が不十分(日野 2003)である。岩井(2004)においても、国際英語教育において、教育の基準をどのように定めるかについては明確な同意に至っていないということが指摘されている。しかし一方で、ESP では、今までのジャンル分析の研究は、特定の分野での様々な実践に応じた変化に集中してきたが、国際語としての英語使用や異文化的要因からの変化にはほとんど注意を払ってこなかった(Bhatia 1997)ことが指摘されている。

このような現状を図式化すると、以下の図 1 のような関係が考えられる。

(図 1) ESP と国際英語の関係



(図 1)で考えると、ESP と国際英語は、国際コミュニケーションという概念で結びつき、それぞれ教育学的研究、社会言語学的研究という独自の専門的研究の強みを持っていると解釈できる。前述の指摘のように、それぞれ特有の専門的な研究分野は有効な国際コミュニケーションの実現にとって重要であり、逆に言えば他方が不足している分野であるが、それぞれが今後発展していく可能性を示している。

3. ESP 教材の分析

このような ESP と国際英語の関連性を踏まえ、ここからは ESP の教育実践に目を転じたい。教材分析の研究に関しては、国際英語論による学校教科書の分析(Hino 1988, Matsuda 2002)が行われているが、特に ESP 教材を国際英語の観点から分析した研究は今までなかったのではないかと考えられる。ESP 教材における国際英語の観点にはどのような意義があるのだろうか。ここでは、あるホテルのビデオ教材をケーススタディとして取り上げ、その教材を国際英語の観点から分析したい。

3.1 対象:ビデオ教材について

本稿で分析するビデオ教材⁵は、筆者があるホテルに勤務していた際に製作したものである。以下の表 1 で、分析対象の ESP ビデオ教材の概要をまとめた。

(表 1)ESP ビデオ教材の概要

目的	ホテルの社内英語教育用 (基礎的な英語能力の養成) ホテルスタッフに必要な接客表現を身につけサービスの向上を図る。
ビデオの種類	フロント、フロアサービス(ベル)、レストラン、ラウンジ(喫茶)、ハウスキーピングの 5 種類
ビデオの長さ	各々 30 分前後
主な内容	ホテルスタッフと外国人客との会話
出演者	ホテルスタッフ役→上記の各部門に所属する日本人スタッフ 外国人客役→アメリカ人スタッフ

このビデオ教材は、企業内の英語研修用に製作されたものであり、全 5 編から成るビデオは、ホテルの接客部門の中でも特に外国人客との接触が多く、英語でのコミュニケーションのニーズが高い部門が選ばれている。また、各ビデオの内容については、該当部門の責任者と相談(ニーズ分析)し、使用頻度が高く、且つ、ホテルスタッフが難しいと感じている表現を選んで、筆者が会話場面を設定し、脚本を書いた。各ビデオの長さは概ね 30 分前後であるが、レストランは必要とされた表現が多かった為、やや長めの 40 分程度となった。ビデオの出演者は全て、該当部署の社員の中から特にホテルスタッフとしての総合的な技能に優れた者を人選し、外国人客役はビデオ教材製作ときにホテルに勤務していたアメリカ人が演じている。

3.2 分析

今回の分析では、特に出演者のモデルの役割について国際英語の視点から分析する。

ホテルスタッフのモデル(日本人)について

まず、日本人スタッフが話す英語の発音は日本式英語であり、それをこのビデオ教材に採用することで、日本式英語を学習者が達成すべきモデルとなっていることに注目したい。日本人出演者全 13 名の内 2 名はアメリカでの在在経験があったが、その 2 名の英語でさえ母語である日本語の影響が多少なりともある為、ホテルスタッフのモデルとしてビデオ教材に採用されたものは紛れもない日本式英語であった。また、これらの出演者達は、ホテルスタッフとして十分な能力があると認められていた為、Smith(1983)の英語学習のモデルの基準("Any educated speaker of English")にも当てはまる。更に、このように日本式英語のモデルが採用されたという事実は、このビデオを使用して学習するホテルスタッフ達に、「日本式英語であっても外国人客とコミュニケーションが取れ、十分なサービスを提供することができる」というメッセージを伝える。また、これは、Smith(1988)の英語変種の理解しやすさの研究でも証明されていたことでもある。そして、国際英語論(渡辺 1983)でも主張されているように、日本式英語が学習者達の学習動機を高めると同時に、英語での国際コミュニケーションを促進するという効果があったと考えられる。

更に、ホテルスタッフ役を演じたのは、各ビデオの部署に所属する「本物の」日本人ホテルスタッフであった。従って、ホテルスタッフとして適切な立ち居振る舞いは当然身につけている為、ビデオでも出演者は自然に振る舞い、ビデオに収録されている。これらの立ち居振る舞いは、深々としたお辞儀、丁寧で柔らかな物腰、きびきびとした動作などであるが、日本人としての接客態度や日本の文化を反映したものであり、ビデオの中で英語を話す際にも変化はない。これらの一例を挙げると以下ようになる。

- ① ラウンジ(喫茶)のスタッフが外国人客を迎える際、まず、深いお辞儀をしてから、"Good afternoon, sir."と話しかける場面。
- ② フロントで外国人客に記入してもらう為、宿泊者登録カードを手渡す際に、指を揃え両手で持っている場面。
- ③ ベルボーイが外国人客を客室に案内する際、きびきびとした動作で歩いたり、丁寧に荷物を運ぶ場面。

ホテルのサービスにとって立ち居振る舞いは重要であり、サービスをしている外国人客だけではなく、そのサービスが視界に入る他の日本人客にも影響があると考えられている。例えば、外国人客に日本風の丁寧な立ち居振る舞いでサービスをしている光景は、近くでそのサービスを傍

観する他の日本人客にも「良いサービスを提供している」という好印象を与える。更に、これはホテルのサービス方針であった為、ビデオ製作の際もこのような立ち居振る舞いを(英語を母語とする国々のような)欧米の文化の影響を受けたものに変更して収録することは考えなかった。そういったことが上記の①～③のような形で、このビデオ教材となって具現化した訳であるが、これらは日本人の言語行動の社会言語学的側面として、コミュニケーションの一部と捉えられる。こういった日本人の文化に基づいた英語でのコミュニケーション行動を反映している点は、国際英語の視点が反映されていると言えるであろう。

外国人客役のモデル(アメリカ人)について

外国人客役としては同じホテルスタッフのアメリカ人が採用されている。ホテルスタッフ役が全て日本人である為、一人は英語の母語話者に出演してもらう必要があると考えたからであった。また、撮影にあたり、出演者にはホテルの知識があった方がふさわしいと考えていたので、そのアメリカ人スタッフは、そういった条件にも合致していた。しかし、ホテルを舞台とした国際コミュニケーションでは、様々な国の人がその参加者と成り得る為、外国人客のモデルとして一人のアメリカ人のみというのは、国際英語論の視点からは不十分である。即ち、「聴き取りの対象となる英語が、発音に関してもまた談話規則や社会言語的規則等についても英米語のそれらに限定されず、多様性を体現することが基本的に望ましい」(日野 2003: 26)為、他の英語の変種を話す外国人客のモデルが教材に盛り込まれているべきであったろう。特に近年は、筆者が勤務していたホテルでもアジア系の観光客が増加しており、ホテルの教材にアジア系の英語変種を採用することは効果的ではなかったかと考える。

4. おわりに

本稿では、ESP と国際英語の関係について考察をし、実際の ESP 教材を分析して、ESP 教育における国際英語論的視点の意義について考えてきた。ESP と国際英語論は、国際コミュニケーションを主眼とし、重なり合う部分が多いが、それぞれ異なる部分は互いの発展の可能性を示しているとも考えられる。特に、ESP においては、国際英語論の英語の変種の視点は学習者の所属するディスコース・コミュニティでの英語使用の現況を映し出し、それが学習者やディスコース・コミュニティのニーズを構成することにもなる。従って、教材をはじめとする ESP の教育実践にも当然反映されるべきであろう。また、日本式英語に対する寛容性も学習者の国際コミュニケーションへの動機付けに深く関わり、ESP の教育へ重要な示唆を与えるであろう。このように、ESP と国際英語の理論を互いに補完し発展させることは、更に有効な国際コミュニケーションの為の理論の構築や教育研究の発展の可能性を秘めているのではないだろうか。

註

- 1 文部科学省ホームページ http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/houdou/index.htm
- 2 ディスコース・コミュニティ成立の為の 6 つの条件(Swales, 1990: 24-27)
 - 1) 広く認められた公的な目的、2) 相互伝達の為の仕組み、3) 参加のシステム、
 - 4) 一つ以上のジャンルを活用、5) 独特の語彙、6) ある程度の知識をもった新参者の存在。
- 3 Bamgbose(1998)は、日本に代表される EFL(English as a Foreign Language)環境の英語教育については、ネイティブスピーカーの基準を参照するというのが普通である、と述べ、日本式英語に反対の立場を主張している。

-
- 4 Standard English について Munby(1978)は次のように解説している。
"This is a *non-regional* dialect, a superposed and supra-national variety reflecting the general consensus of educated and influentially placed users of English concerning its orthography, vocabulary and grammar, but not its pronunciation. There is no standard accent for English, so regional accents can be used with Standard English."(Munby 1978:85. emphasis original)
- 5 企業内の英語教育責任者であった筆者は、実践的な英語教育を目指しビデオ教材を1995年に製作した。製作した当時は特にESPや国際英語に関する知識はなく、これらの視点を意識して製作したものではなかった為、本研究で一つの企業におけるESP教材の例として分析対象とした。

参考文献

- Bamgbose, A. (1998) Torn between the Norms: Innovations in world Englishes. *World Englishes*, 17/1: 1-14.
- Bhatia, V. K.(1993) *Analysing genre : Language use in professional settings*. London : Longman.
- Bhatia, V. K. (1997) Introduction: Genre analysis and world Englishes. *World Englishes*, 16/3: 313-319.
- Crystal, D.(1985) How many millions? The statistics of English today. *English Today*, 1:7-9.
- Dudley-Evans, T. & St John, M. J. (1998) *Developments in English for Specific Purposes : a multi-disciplinary approach*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hino, N.(1988) Nationalism and English as an International Language: The history of English textbooks in Japan. *World Englishes*, 7/3: 309-314.
- 日野信行(2003) 『『国際英語』研究の体系化に向けて:日本の英語教育の視点から』『アジア英語研究』第5号、日本「アジア英語」学会、5-43.
- 岩井千春(2004) 「国際英語教育の基準はどうあるべきか・Discourse Community の概念から考える」『社会・文化と外国語教育』大阪大学言語文化部・大阪大学大学院言語文化研究科、33-42.
- Jenkins, J. (2002) A Sociolinguistically Based, Empirically Researched Pronunciation Syllabus for English as an International Language. *Applied Linguistics* 23/1: 83-103.
- 國弘正雄(1984) 『[新版]英語の話しかた・国際英語のすすめ』サイマル出版会
- Matsuda, A. (2002) Representation of Users and Uses of English in Beginning Japanese EFL Textbooks. *JALT Journal*, 24/2: 182-200
- 深山晶子(編)(2000) 『ESPの理論と実践——これで日本の英語教育が変わる』、三修社
- Munby, J. (1978) *Communicative syllabus design : a sociolinguistic model for defining the content of purpose-specific language programmes*. New York : Cambridge University Press.
- Morizumi, M. (1994) On correlation between LGP and LSP in Japan. In Khoo, R.(ed.) *The Practice of LSP : Perspectives, Programmes and Projects*, 143-156. Singapore : SEMEO Regional Language Center.
- Noguchi, J. (1997a) Materials Development for English for Specific Purposes: Applying Genre Analysis to EFL Pedagogy. *English Teaching* 52/3, 303-319: The Korea Association of Teachers of English.
- Noguchi, J. (1997b) Easifying ESP Texts for EFL Science Majors. In Orr, T. (ed.), *Proceedings 1997: The Japan Conference on English for Specific Purposes*, 13-19: University of Aizu.

-
- Noguchi, J. (2003) Comments on Petersen (2003). *Journal of Medical English Education*, 3/1. 27-28
- Petersen, M. (2003) Logic and Accuracy of Expression in English Writing. *Journal of Medical English Education*, 3/1: 18-28
- Quirk, R. (1988) The question of Standards in the International Use of English. In Lowenberg. P. H. (ed.)(1988) *Georgetown University Round Table on Languages and Linguistics 1987*. Washington D.C.: Georgetown University Press. 229-241
- Smith, L. E. (ed.) (1983) *Readings in English as an International Language*. Oxford: Pergamon Press.
- Smith, L. E. (ed.) (1988) Language Spread and Issues of Intelligibility. In Lowenberg. P. H. (ed.)(1988) *Georgetown University Round Table on Languages and Linguistics 1987*. Washington D.C.: Georgetown University Press. 265-282.
- Swales, J. M. (1990) *Genre Analysis : English in academic and research settings*. New York: Cambridge University Press.
- 渡辺武達(1983)『ジャバリッシュのすすめ・日本人の国際英語』朝日新聞社
- Widdowson, H. G. (1997) EIL, ESL, EFL: global issues and local interests. *World Englishes*, 16/1: 135-146.

参照サイト

文部科学省ホームページ http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/houdou/index.htm